# 羣書類從

二百八十下

内閣文庫
和

内閣文庫
番號 和 18690
冊數 666(355)
函號 215 3

国立公文書館
National Archives of Japan

群書類從巻第二百八十二

和歌部百三十五 [illegible]

検校保己一集

建禮門院右京大夫集

[illegible]

群書類従巻第二百八十下

検校保己一集

淺草文庫

和歌部百三十五 家集第十三

日本政府図書

# 建礼門院右京大夫集

寿永元暦なとの世のさわきハ夢ともまほろしともあはれともなにともすへて〳〵いふへききはにもなかりしかはよろついかなりしとたにおもひわかれすなか〳〵おもひもいてしとのみそいまゝてもおほゆる見し人〳〵の都わかるときゝし秋さまのことゝかくいひてもおもひてもこゝろも

こゝろもなくよみ出る歌のきこえてよまぬ人も
ちかきいひ出る人なりしかハたゞいへん
かゝれさるものゝそらくもいとゝくを
みゝ人なまよく事大かた世さへうして
ものをきゝうにきこえたりしかとハ歌人
ほよみなれハ心ははひとなかりしよしあまり
なりし人をあはれなきこととなれといふても
ありて他にふましるしよりけふ志のひなを
志てそのいかうとくためゝひてそなにひ
なからおりゝもたゞ大かたれてゝはまを

かゝる世はさもさふなりぬ事ハはかなさすかな
たゞいまでもなんといふたかひなさるゝく
はかハされかふ流ゆはかりけ氣ハかけてんや
たとひなほと思へれともかうにさこえなま事
てもらし月といふはかりのしもなりぬる情ふ
みちのふりをかなへん思ひや事りし命
さらひいまたもしなくてありともすへていまハ
心をむすしのみとおもひしと思ひ志てゝめて
あるなんその世へハねもとあたま事もなまの
なこりその人の事なくと思ひさちなハ思ふ

かゝりけるとよふけてしんよなきれいかなるへし
とゝ弟なりておほえ孫ハなよろしおもひ捨て
人のもとへはてゝなとといひてみゆるゝなとに
明石の浦よりはせつとおもひよりけるをなを
さりまてさとえぬなとおほしそよす須磨
こゝにまより弟をとかへてける弟とおもひなりぬるを
程とゝすみハのと此代よなりぬへきなんいと
人ちおほしきていひしものけよさるこそこそ
しけなりてかいひしまんたく波の下ハこと
の紫けなりしをつゐよ秋風をしめしと

夏風ちのゆゑへをこそし心地なみのたとへん
さんの心あるかこそこの氣をといひおりぬ
人ハなく道ともかみるへくもさの人のとも
ハたまうあるらんとおもえしうハへまれいたます
つくしとおもひつけても孫よもあまよ道を
佛よむかひさまつりてなきくへ人よりかの
ことなしさまとけよ和ハかきりある世ゝふ
あくんちまうふるまたまれ弟をおもふゆうふ
人よまうせてもとりなしや出なとハさえせぬ
またさてあくるに色くもいうくて

まことなしとこひしとぬらきたる事をみてハ哀なるみそうと
よしき
いえんかことなき心地すて秋のくれもいとしさふ
すしとくて見つき心ちハせん月は殊らさ哀
哀れしよ雲はれてすまる風のをとこそふ
かなしきをなかめつゝ物思ハなきさこひのそ
いかなる心地ならんとのこかさくらさる
いかてまていかなる事を思ひつゝよひ月に袖ぬるらん
秋のあけ日は遠なる事をみきてよはかこ
ときおもひさゆむ事ハいかなしてかあらん
さ遠ハいかなしてかせめてハ今一とひらくおもふ



ことんとはいえんなくおもふはかなふましきかなしさ
おもかけこそうきたるさまなくはるかにきこえは
すへていえんかるなし
いそやとおもふ事は初めてすれハはしむなしやつるまなかるらん
おそろしきはせく梅とはいくらくてるならんと
きくまはいかなる事をいひきらんとかなしくも
うすなかく稀なる夜には稀よみますれ
なをしすかまて見はおもひさてしくのく時
ひとめはおもそしなふうちなかめてあらとみて
ささくらはやかてきみえさる心地いふ限さかな

国立公文書館
National Archives of Japan

かしたくつくれけるさてやあらんとおもひ
ゆくほとに
波風はあらきほとにさまたよひてさこその世人さへなりゆめ
あまりさなしきん心地のなごりまた身をしぬるみ
ても心地はもひしりまいはちハなくれりなんやと
おもひゆ
うきう代にはいきはてとさころぬさこそは世世はにのそのうハ（なをまし）
と思へとさらにあきつまれさらなし
あらるへきん心地はせぬに程こへてなみまて経るそ思ひけれる
ふる年は暮ゆりある人のおまいりすしとあ



さそひしハ何の事にあらんまてたちとさらされ
こそなまほハおもひなしてまつりぬる人々さたに梅れ
花なかの色なるさはおもしろき所ありて人の
立へしハくせてまてゆきてるふまてこ小世れ
つ様なくぬ花のいときなりその所れあり
なする玉しアも人をはかるふをさけいとしく
此花をとふ見ゆひてこひ多く人々かへひゆ
こうしそいろくはちきちう侍るあたまはと
いふをとさえとこふ見まハその人とし花たし
うなる名をいふなかきみさりなるをん給はま

ゆふとんにはかにゆゝえんなりける人を花に志れなく
そのすゑあさましくおそろしくきこえし
こゝにもたちくみしくむかしなりける
うすおそろしてあやぬ給まそとさるなかうて
かうくいえんもさなきにてもさこえてしまし
しなとへのいひしにためしなくなむ
飛鳥井雅経朝臣とも申すやあるのとこそ申つたへ
志けまゐの三位中将のうきあにまりて給は
志はしときくしころともなく薨ぜられにけり
人々のなかにもあさゆふなげいてみ志しきことを



いひ又ある事こともなく人のさえハあんさふ心
志ろひをなして御かへしをいひなり
ける中にひそとかうしみける人の心うれを
つけてめしあてにまいりとてみな心うくかなさ
いえんもさなし
飛鳥井にも申すべく志てその昔からへしとは思ひてもみ給
ふしくんのうちをもいひかけられて
また志なぬけ世のちにすゑをつてなにかにてありく給へ
また事をもりたる三位中将くにせんて才をなげて
とて人のいひあらそひしいつまでもいまに世を

みきくもはけにすくまさりしなとおもひなるを
あさりなまてきこえてこそあつさかりしかさち
よういにむかしいつみるなふたゝひもし
なかりしそうしさまハおりくにハめてぬ人もや
ありしみかとちか寺にのくけ殿にて青海波まひそ
のおなといひける源氏のたえし御おもひ出に
なるところそ人くいひしか花の宴ハけに
けそさまぬへくなと笑えしそうしをおりく
もおりけハさるところそみなまつしあそさまハ遅れ
といひなくなをこそにおなゆおなかりなりと思へと



おりくハいたましきこそてとりつへしうへさまと
さやハあるといたましてなをとかすく出しとも
いふはかりなし
其比紀式部よく人に侍れ世むなき法にまよひて見ぬ家
出しけるかゝるうき名をこ紙のうへに代波よ身をきはめぬる
こともおなしゆかりのおもひけるにこれ法よかりなる家
うきみハさなまてれけ三位中将ときとよう孫中将
とかよしなりぬるなとさましく人のおもひあへ
りたれのこゝろていかにおもしろくやいとくおなゆ
らんなとさましくおもへとも孫てふひてこまそや

まことならむとおもんたよりにはけてことの葉
一ときゝかんたゝ耳にそれたるもいかなるたより
まつけてやりし中より今ハ身をとゝむるとおもふ
をとこまてはさおもひて後の世をとふとはかりこそし
ハたしかなるたよりは志かたきことハ又かなたにて
こまよりはゆかしこなるとおもひなる心地うち
をはえいひやらぬよはゆかりのくさはかくのこと
みなきこして給あさらぬたよりそてつらふ
唐三年あてハ悲しくかくしまてはきこえ
しとおもへとなといひて

さなくは死み道てこそとおもかさあひ逝き仏こゝにせ候
如我よりて形をふるへてこそ思ひ道あるかあるかにはあらぬは世そ
はゝはかりたち給てなきといひて
おもふ事をおもひ出るまゝにおもひてこそおもひよそへていとくるしきこと
なしやたりし悲るははゝかうまゝしたよしといひて
いまハこと身なりてはかなあはれのことゝもまたハ悲しく
おもひとゝめぬる心地みてなんなまめかしてのこし
まくりそやハすへきとて
おもひたちめおもひきりては立後さへかたにおもひてことそ如何かあれ
今ハすへて何の情はなきをみはせらるゝはせさることそあはれ

さきたちぬる人にのこるすいひて
あるなかにあはれなるはあかぬうちにかくうき事をみるそ思ひき
とありしをみしんちよしてえいふかたなし
まこと此年来そまそとにこの世はかなきことをきゝて
するを此事とはいはすしてなすましくいふえんとるな
かくしてくひしこともなきてたかましとも此みおもひ
ゆあまりにせきゆるぬ涙にくもりはみえる人々くまは
つましく道かなしとか人まさなとふるめとくち
のこりしきてよろつきて袖をしてのみそ
人のかゝふなきすしいかそむをしすましんと

思ひてとあやうくに西影ハ斗まそひこと此かことゝふ
きくに地してかすをせめて思ひきてといひつくん
御きゝとなしたてゝみきゝある気まそそうなく
なくきくへとみえをとふてそ思ひきるかいひおもへ
こと道のなかにそうためしよせんと思へくおもへて
なへてよれかなきこえを思ひとのかゝる夏みぬ人へやいひそん
なにんてへのゆくはうさてそこはあてさゝはうか
いひ道のなへて此ことのゆうまと思ひんて
かかりし又気とりよ此あはれ人さとこ家あゝはこそあゝ思
はてはむまそなかゝゆる世はなゝひんてくゆぬ

それぬとしつゝきんかふかしきはよしを
ねをとらくおもひつくるまゝにいかなしさにをと
まさる心地ぞなかなか哀なりける契のなとに
我身をとものちよいあはれ因しゆかりけれ
後みる人のしるしは志るぬとなんかおほしくこそ
なまをとさしあたりてのためしなくのこまかゆ
昔は今はたくのともなるかさりある別こそ
あまたかくうきことのいかにあり乃るとのみ
おもふはさるたるみてたとらくさんかおもひなま
みしとのこ見すまてさいらてらいまいますまえ



とのみおもへとかなたぬにかなしうきめ
たえんなくかゝる別ぬ涙とまる面影はかり身にそふなそうき
いそ今はうらみれさりのをおけりすてをのこすまたるへすに
こすまんとおもひてはまた生は後なりなかりんこては出しさ
たゝむ孫をさ海はあまるおもひのみなりは俗にひ
そこらかしうて後の世をかけなる法思ひ出まてと
いらしねをさこそ极のきえは心あさうし
かりはたんまさをそれりうのこりて誠にまへては
さんかあるうたんとするりあらむ人は世ふかく
なへてなまるすは石ゐるかしなとら身をなり

のこゝにとゞめおきまゐらせてかへし給ふ道のおもひ
れうしてわくえういかうしてまゐらせつけにすゝせ
て經かき又はなかゝうたせてのち極楽ゆる
うまれゆく道へうへにはおしへくしてもかう
地蔵六ときいすみかきにうまれまいらせなとさまく
ゐさしはうりとかぬれまさ人め清くやすく道六
うとき人ならば志づか世次ゐ初ねよひをおもむかね
しけれ程とこそかゝし
すゝ宮のちうひた愛そう何しそくめなれ六の花をぞ合せよ
なとなりくとゞひ極んしてあせうとき人の由緒へ



やはらけて人にうせさ紫なるさんの積かりし
けるゑかくなき道の御かたくてえんせうをたに
なるよく道さらぬるのをおそろしくかかせなとするに
なかくみけしとおもひてさんかにみゆる筆此語
ことの紫にかゝりて夏に前の語は源氏
かゝるなしひなするをとめにくまんに消つゝ
いさんさとなしそれおりとあしかゝりし
おりまりいひしこゝのあひしうひなよると
みゆるかかきうえんやうにおそれゆ道のゐそへに
のこきんうなきやうにきうてむる日よも

みるもうひなりとかや源氏は物かたりにある
ことおもひおもへるもなまれんのありてとく
つまなく物なゆ
思ひさへいとかりよ承りて悪れ給ハ中くさえ縁とそ思ふ
かへり給ひまさてつまても秋く物なかなる玉ねもし
夜ゆかりことゝ絶つ縁よ成るかさね世のとの
たよれけとすてみおもうしときハ行の紫ハつよき
月よよしときてる世うすてまてとよむさへさけて
みゆるよ物しさまもまり袖ひめやとまとうさ
かゝさるゝ心やしいとおゝけさ本す悲よかし



かましきまて鳴くそんもとゑなる心地して
ことゝまん事まてや物とも思ふ人を縁とも深く成る皆く戸
なくさむるゆもなきすまにハ佛よのくゝむかひ
事るもさんかおきさなくまいらのみさえし
かとうさ身思ひしるゝのみありてまたかく
ためしなきものをおふもいかなるゆへこと
神も佛もうらめしくさ之なりて
佗りとも頼む佗もめくまねハ後の世まてと思ふ悲しさ
行末なく我身もさてハあくかれ迷ん独りむ（さ浮世なからぬ小）
小山の庵んよよしあるなのあつちしそえり

かくなりゆく人のつかうまつる所にそ花はさ
かり秋の野へとみなつ袖ふりもては
たまはみしかるはあやしきとあるを見れ
猶まなりてとさくしをゆかりあるをはし
かはせめてのなかに志のひとつもとりしてみまへ
おり給ひききさきちてまとかさとさるさまそ
ふかきなさきみかきはしろくまし色を流
ちかはかくよすぬきるそまにあらてむかしと
こけれ志そりつゝはりかしきよりと
あかぬよろしくしこときは志かりあひて



小南は庭よみさまあつし萩なちまかちかかり
袖もすくすきかますて小虫は袖をけさ肘くと
みえりよ車よせておりしつましれはとまて
たゝ袖とりなむるかさまくおりひいつる
こゝあまといふはなかくありましはあはおち
えぬゆふよりかさみさるゝ風もちなつ
春きえし詠る肘をなりえてなつりは
詠をと流とみまみんと思ひをさてしいて出立て
末は庭よ柳さゝては折りとけするをとませて
あまたう人なくてうしを一条は集はあらぬ

みるもたゞ今はいのちするほすゑはかりハさるに
かゝあるにやう〳〵かなしくて
うへてみし人は枯ぬる跡に猶残る梢をみるも哀なりし
我宿と思ひしまてあれにし花は見し世の事なかなかすゝまそ
まさるあはれまかりし阿は昔のあとの様になり
おもひしすゑたりのこりけるに草ふかくて
秋の花とてちりくさき出てなからちて露なき
つゆもしのてゐしてくさ袂あひてきこゆるを
ものすへきここ地もせねはたゝおもしへきまゝを
とゝめぬみるもいかとうきりたりしとおもひえて

みさらにさかけむそゆかみてゐてむる事もはゝなし
たゝおれ〳〵しとをもそてよるもあてゝとひつゝ
たえぬ哀ハさんやうにあり〳〵ぬるにうきてその
きくうさぬるさまいかにそあれし
定あさき世といへともかくかりうきてあらそそ又あかり
女院大原にわたらせ給ふとはやうきこえてま
いらすまいてさる御まてにいまをゝくへき
やうもなかりしをふかきこゝちそしらぬへくすゝて
こりなくいろ〳〵様まかりたいにてゐりしいとゝつゝ
すくに山そちかくしきよりまゐ御ハさきさこちて

いふかたなきにいろかはれるさまはすまゐことかう
すへてめれみあけゝまて昔の歌ありさ海
みちのくせさるんさ大方さはさとくいかく
をもなのめなるんすして落そつとも小ふ
かさなりし秋の月きゆうおろしちかき横よ
むかきあひてくけるはなのちつまて康の千恵
むしの孫いつくもはてとなまてたゝめしなき
かなしさなり旅そ生はのきさをそちかさ孫
ちゝくし六十よ人なかことみをするく
さまれ卯ところへなそてゝるすみ涼はすなこゝすみ



まゐらふ三四人それりそさなうへるさそはく
まれさてもやとはかりそ我も人もいひなき
しむせふ淚よおなまてすへてこそれつけ
らまん
今や落葉やゆめくと迷ふまていかにとろくとそなき
あふさみ昔は雲の上は月かゝるみ山は陰そかなしさ
花は匂ひ月はひかりにさとへてもむとさよの
あかさりし頃わすれりけあらぬかたのみたとう
るれかる頃てもとみなかくなまはにおなれ
旅へさまいなまてとて ゆかるんとうしとましく

なかし
山ふかく家をさぬる我心やそ住へこゝろゝとそまし
何事につけても世すてなくしなくるやと
のこおもえて
なけきことひなかくまよしけと思ふまゝそ我身の世かりけり
あるをさむことのいかすしてかあく人なき人あくぬ
とところ猶かそらをそく思ひさたてとあるまゝを
まいおりひいつることとみて
昔へこれなき心にまかせてハ猿こゝろをハなるとあんまゝに
是をいひとひてもうへなてりあるとまゝしてとなるをおもひ人出つる



なさし此所ハむえ坂のもと此とこり来たり雪ハふき
みし妙りさるに歌ハはるかに庵てりぬに
仙花てなよの思ひ出よりと仙なそし夜
妙なる何となかり此一つにこれ妙さるう人をすく
るなとのするハまりあん違とのことをききて子
す浅よ思ふくとそあかる
うきなる所かうと此道といかくれかり此宿と花ゆる
哭一ここそこえぬるハいくそとあしきを楷み
もくあし此をとな歌すりハてのなかにもけ
しきり

哭こゑていく雲井まて庭にて祢と哉よハ来ぬ山おろしに
つくしとおもひてたゝ一すしにみし人の
後のよとのていのうらすもかひなき
こゝのみ忍ひしとそれまていかハそらねを立
なてみ里ハ梅の木に鶯のなく様りけるを
みるにハいつのとしにや大内にて鶯のいと
さかく様りけりしあしたとの有すける乃
おつてある人をもまてこの木にあつかうし
たりし鶯をさなつゝおりてかゝたりしを
なとそまいらせしハおほしまいらるにうとやしハ

我さちなしくさもれ木なま里ハ梅りなかりし
くさしこひしおりくて今しとおもえてかなし
きこそいふかとなき
立なまつみかき風たちの梅に鶯ときこえにし人やこゐかりん
ときりおもひゆるこのみる木ハ昔のことかり
て涙にさひし
こゝえんさ月なるては梅よ昔の袖のかをのこれやと
風よしたひてなることのをとのすゝしすろり
りのかなし
ゐしよふあひなることのをとはなきにとてきてくるなしき

はるかに旅のそらをなかむるまゝハたえぬへくと庭てらう
うる雲井をみれ
我なからきこえまにたかむまハしのくえと雲ゐとしけれ
十二月一日ころなりしやらん夜に入て雨とも
雪ともなくうちちりてむら雲さはかしくひとへに
くもりはてぬものからむらむら星うちきえし
たりひきかつきふしたるきぬをふけぬるほと丑二つ
はかりにやとおもふほとにひきのけてそらをみ
あけたれハことにはれてあさきいろなるに
ひかりことことしきほしのおほきなるかむら



なくいてたるなのめならすおもしろくて花の
かみにはくをうちちらしたるによう似たり
こよひはしめてみそめたる心ちすさきさきも星月よ
みなれたることなれとこれハおりからにや
ことなる心ちするにつけてもたゝものゝミおほゆ
月をこそなかめなれしか星の夜の
ふかきあはれをこよひしりぬる
ゆきいたくちりて積りてはやらさるあけかたの空
ゆくへのかゝるたすかゝす道をあけゝまハ袖な
をぬらしつるよこ夢まてゆうてそその

らくかたゝへてゐやうそむきうしこゑるか面白
まいすゝふてこゑみせなやとおもふ人のすさき
あさ道なり
何事をおもハすとこそ我袖の露ハとけんかたこそあらしを
いとへ心のそきさらひのするゝふとくまい川
雪きえゆくそらうくあまさるゝこゑをきかぬ
つ
さそそこに深みも此山も雪ふかきて比叡のおろし
紫ハ此かなむるふかきそのまのこゑ道
のき一すなぬ雲れゐしきまれ

大かた此道ハかりに定すへきを我心ときこゆるそハ何のかぬ
そこらも此なること此ことゝなひれさまし さそハ花
しも大かた此なまのこす急度への心しきれ筆也
今道なれハかなら道此まそ吹きひさる事など
なくなりれさよ此ゆきしきれ花ひまそへそ
ことおもし
秋すきてするこハ風ふのこりより何此なこりれ人のよそなき
里川かゝる谷川のこゑりハむすひなからさはり
心をそきころとのたえくきこゆるにおりふ
こゝのとあり毎

芦川は七紫とちかせし迄よりも志さまは絶ぬなれはさらに
ましく秋をこえて頼へいつるなとは志かれしく
ちりふいり江はこなり志つくよせくる波の
之くぬる地して書はれつもてみまくし迄は
白妙なり
うら山しき浦ちのおそちら へくぬ波をも又ふくかなん
海のおりそいぬかみとりよくるつくとおそろし
けよあまてるふ ととすきみとくしのむひ
まうるもしきふなちよそ宮はあれくの
はさま迄と川まて晝夜をまてきたゆるをされ

よそめには波風あらく成かゝぬらしき
ようすゝめ木草もなき濱へよりて風いつよ
きにいつにそ波よりよし人のかゝるまとひ
もあるとおもひのなくさたるかいなに
すゝうきもとりなりとれともまゐりて袂
せんとさへあんせゝ迄て
惠志の人はあはみれ海なかのあらき波もなにしほ
む月のならいすくるころなりとれく甚かしき
うりくとりすみなりけるに高倉院の中納
言典侍といひし人なまめのうちにさなるか

あなんとあはれしかハ昔のこと忍ばるる人々も
おほくてその日をまちわたらせ給ひあふ
ことありてとてまかりぬことしはそのあまりし
忍ぶよあまたつる家の前のかすみ月さして
梅がかりつつえんなりかつめあかしきに
はじめてやゆる
思ひかけさくなこりぬと詠めましける御まへの御えせには
なし
忍へらはそあまた此なりさ此見しそふはなたの御
こともなるてはなき枝かけるさとへのそさをよ



おりゐてくまるはまてすゞ御法のこと
そゑんことゝかうてなかりけるに
うきことは此いめそのみ何かしは思ひあへては御持ちなり
二月十五日涅槃会とて人のまいりしみ
さるをまつりぬおこなひうちしみ
おりひつくまゝは釈迦仏の滅せさせ給
りんおりゐてて偈なとのうちをきてよ
あはれにて持経のことよおがみて御ともめ
かゝへおもゆるもさまざまのことかいなくさて
しかと此ころきくかいつくしみつく

おもへとも猶うかりしく流れとまくぬる水なかり
らふましきまつ世のなかとはやしそ見ゆなけ
りしかとも思ほゆ

世中のはかなきことゝもあしともかくれせし月のそらにくる

殷富門院皇后宮と申しころその御方
はさふらひ人よゝふの志るよしありて此のえ
うちしらりもあはれに思ひて御涙しそ
御済ぬるを見りありうちつゝて心あはれまさく
このへ水こゝるよりおもひ〳〵思ひすちある
こともおもひ〳〵ありしかはおもひしくは



あらさましくそまてひしくおもひいてゝまて
中ゆる

いつみせん分けぬかねぬるすをり我らぬさみこそ夜の窓
孤し

詠めける夜は夜に更まで待ちつゝ共ぬるを山のあらせえや
四月廿二日あけたるまてのきゝに人こし
ぬりける小東此のさの二条郭公の初音まさ
きつるめつらしくあはれにきこえけれは

明かたに初音をきゝつる時鳥志て山路のこともとはゝや
あらためらる世の中まで時鳥いそつる初音のつまさまん

五月二日むかしの母のき日なり心地なや
ましかりしかとてなかとあつかひて念仏す
経よむ法師ともよひて経よませてちやうもん
するにもまつこひしき事ともおほかるにせぬ
ことはやと思ふをもさしのあたりて袖は
まさぬまぬ
別れし月日よりあかつきは是はかりやと思ひつゝさ
やうひの九日あまりにそうなりし
人のなのあるとなりける日なりいの
ひとへにまことく思ひとなむよしはしらるらん



後たまりこまうなくらは思ひやらるゝおほゆらし
なくて思ひいつへきゝ人はなきかうこゝろくゝなり
くるしくてなくゝよりなかれてそなき我身
のなくれよりはこまうおほゆるに
いかにせん我後の世はさては様眷属はふかくとふ人はなる
よるは物も夜すきさへみなこゝちよけにて
あなとみとりするよなめしなきこゝとうとされ
さへつる鳥の声も思ふことなけなれは
よりも波よりきくてさまよひたる
時えする雲風しきては霞は梢にかうしく山ゆくへそしらぬめる

つきもせぬ今日こそことしもたなばたに今宵晴るゝ空はかきくもりつゝ

としとし七夕によみてまいらせしを思ひいづる

ばかりせうそこまでもつきつく

七夕はふかきまつりとむかしより人のそでこそまつりて手向

織女の袖もやこよひ濡れぬらん逢ふことのはかりは嬉しきまでに

牽牛のゆくへのたまの袖と七夕のかささぎにひと夜をぞなをそれとふらむ

あふはあやにくなるはうれしくて鶉のさぬるをやすくすらん

さまよふおもひやりつるそらのこゝろやみなぬる夜は合ふはそら

天の河瀬はかはわたりにも船のもちあふさぬ浅瀬はとくとそおもふ

こぞのやうかはらぬ日の星の逢ふまでをなかぬらしものを





よるの糸しも絶えずものうき七夕にあふ事かなしき心のなかなか嬉しきよりの

きのふまで草村にそよぐ秋風の吹けばしのゝめのしるしかならずあふ人

人のすむにかはらぬ夜の衣にてちぎりたりしもありせば

此ことなれば合歓の花を眺めても思ひわかぬ我ぞかなしき

手をとりて衣袖もぬれぬまゝ末のさきにもおもひてそや逢ふ夜も夜

衣もやおもひあすると七夕にかはすかさゝぎの橋を渡るの那

七夕はいまの枕にひとこそ濡れかくぬたえまなるを見

いくとせもかはらぬ七夕のあはれはいそぐまに人はつひに

こぞの今のあひみる今日は何ゆへか恋しと思はぬ涙をもらん

衣もや七夕は染めしやらん逢ふ瀬はまだぬまゝの数をとはん

七夕はなほやすらはん舟出してことにこゝろとまるもしのこゝろは
いとはんかねて遠さは七夕に渡の舟をくみまかせて
何をかとまりゐるらん今宵星は天河原に岩まくらして
七夕のあかぬ別の涙にや雲の衣の露けかるらん
何をかは頼みてぞぬる世中に契りたえせぬ合のちきり
年ふとも逢ふは草葉にかゝる露よりも長き契を結ぶ人たに
人こそ稀に契し中なれ逢ふは情なせしあかぬさへまつを
ぬしとはく川のみまちて七夕に渡さぬ先にきてしつる
天川なみの逢瀬はまちて万葉をわたりまにし那
うくやましぬれる星合の逢ふ事よく一夜とも契る心そ

あひよ逢てまつこむかへるはつきせぬになたてめかり天の岩戸そ（うき）
かたしく袖や露けき岩枕苔のちりはぬくつゆりて
今宵こそ待わひるらん星合のうちをおもひこそ逢
よひのまに入ぬる月の影まではあかぬなりやひらきし七夕
七夕の契りあけさしそめてか逢瀬とよそにきゝつゝ
あかつきの星合の空よみちぬるうきおもひなる
あけさに秋の舟人よるまもなしこぎ渡り天のたきそは
あまの川星合の空はよもすがらいくよ明ぬる天のとわたるらん
七夕のあひみる宵の秋風にあまた袖の露やおくらん
秋ごとに別しこゝろも思ふるへけれちをとりそみるらん

七夕にかしつもあけくともかゝる思ひをえしはかなしきに
世中はみなれあひなりぬるにおもはぬ星合せにこそ
なき袖にはあやなかけさ絵はなく神まつるへき天地にこそは
思ひてかけなさせぬもちは蓮の葉にあひぬるへたとなりや
よろしかゝる涼風衣の七夕ためにいまはなそする
かくはかりかさてよ雲るとこひを嬉しの星はいくみるらん
何となくよき風衣は袖ぬきて涼しぬる入りあひのそら
えたまさぬ君ひとりあさ衣星も稀にて契りてあけくれを
あけさそは逢瀬とたのむ天川はてぬさとそわかりたまへ
かさつけは秋はつましとおもひあけくれの暗を星とちかふらん



ひく糸はたゝ一筋にひくとてもひと逢せもうらめしまれつゝ
たえぬひなきなけきにたのむへそこそはてし風を星やいひまさん
よしやまことなくさめかねせ七夕にかゝる思ひになきにおもへるを
このひとつのやと思ひそもまことくかへつを
まつは
いかまそらの七夕あをくさ思ひん志をてや涼けによあまりなり
まろうしおもとよりなき身をよろうなきは比り
思ひそらよしらのたゝむよそのおの数はあるなき
こよなひとなくきかまして人よ志のへきこと
とのなけてもおもへさうしをとさるへきくへく

さりとてはひさしくたえてありておもひのほかに
としころのちきりと九重のうちをみすてかたくて
たゝ宮めかしくてあるかひなくのみつまれぬへくそ
おもひの後つかへのことさまなとみるもむつかし
すみなれしところのおもひまてかなしきにつけ
世のひとのよそにきゝかたりけることもなき
ありたてまつりしのちはかりてはまさる
りあかし月のくまなきをなかめておもひあまりね
こゝろなくかきくもりさる暁かたのあはれ
うへにもまいりてみしくもおほしき



上達部にてはあまたおほえある人もおはしますなかにそ
あまりなることゝおもひつけまいらせてありけれは
人のくちのゆゝしきをなくかなしきことなれは
かのすん高倉院の御事思ひよりまいらせて
せさ給ひぬるすまゐも上はさまのみかへされ
心のうちをもとかくかへりきこえしく
月をとそ
ましてはえてすする古をおもひそのとすめる月の影
むかしのこゝろ業秋のよはれたこの恋ん
すいまて白うすゆられて忍なとのきこゆるまゝも

こしくきこなまへしるりきまいおんえさうんや
覆すさゆるゐらんや奏きけ院に申るゝまつおんぐる
とふらくれあのこおりひつけゝまてみ出し
くるみまちて有る犬の竹のこゝのゝこと申と
しありくの背肉のなかさゝにありしか彼
あとはまいりしる折りくよしひて袖うちきせ
おとせしかみしまて有まむいま尾を
そさうしなとせしはいとようおんえくる
みるはすゝろはあへまれり
犬の粉なみまうとに念り人にきこそ為しきてはぬ



それ世のなみしく志りくるを此いりくあしくもや
すゝめとかくゝみよりもおしたてるのうち
えうりゐひつけゝるとうたくきらとおくるか
しくく
我もとそ念はにくる友なるかそよやとゝふれそうりあそせん
五月あるさらぬのくこうしうのみそしのあこり
のこきのかゝきみこうしよしかうそうぬなれ
あやめふく籾くもみまうくぬようさ添いる袖そ出き
人のうきへ中るにはあるをさるへきさ人のやさき
するをきけハ白河院の山崎おんせくてきまし

かゝるをりとしてきこえやらぬ葛とおもへる人の
就人けをそらさゞりかゝるしてそれ名をきくに
いかゞあるまじきことは家のみならん
名光艶と清少納言の名はかりそめにはとみえてきこえうすき
面影はその名は清く清しなせてはみるにつけ思ひまとはれ
かりなる葛は煙の身をさえてさむるよみすきあはれのとする
隆房の中納言のあはれくさにあはてこそとり
ありけりしへてまことはかりは昔思ひてもなをその
かゝいひかしとするへきことはいふかひなしそ
又月五日



つらぬきせ給ひて縁は紐にかけさせ給ふと此歌とおもひ出ける
題し
かけるかゝるき袖に涙はけてむかひいましあやめはたかくてそれ色を
太政大臣内大臣うせさせ給ひにしころ公卿の
中納言はいきてのりてあやしみてかへらまいさまし
まさかなるきことも思ひ色くれさをうきてるよ
うきてくの流れはせしよりそめし
まよりやくん色は此がたきをまけくへうそとよ此歎かりのさやかなるよう
思ひしらはまむかのうすものうり
うきこけるめになりよそるまへ減ぬへきことよはあかりよるのめらさまにそ

親宗の中納言うせてのち菅のちうくみし
人のもとにおくり侍し親長のりとも九月つくるころ
中の事おもひしらるゝにつけてもさまぐの
あはれをつくしてふかき心のひろさをは色ある人の
袖のうへもえこそしりまいらせ

くさ葉風たゝく山里に袖さえてしのゝとふをとふこそ世
あはれさは嵐に吹まよふ花にまさりて松のひとこそ世
秋さえしなを松葉原にも枯てまけさみけさをとふ人住世
日もしらぬまゝにひめくまゝ嵐にへのなをそゝひこそ世
君ことにそめけるしけそ心ち深めつゝとひてこそ世



また二人秋風をたにおもひしらぬ人ぞかなしきまよふこそ
恋し　　　　　　　親長
梅さかう時雨はかりにあらまつりて人め稀なる古郷そかなしき
うつろひもはかりまつる色の花桜をさとみるそかなしき
はまかれさら迷ひ嵐吹にいつとなく涙ぞ枕にみるそかなしき
秋のをとたえぬ昔は譲り若葉ぬれにくなりそかなしき
都にはすら須磨さえあはせる暁にやまし女老きぬそかなしき
くちなしの花色夜ぬさえてふちね袖によなそかなしき
せみなく世の歌そう人めをとふ雲も葉をみなそかなしき
忘れぬを又も逢へき秋ならぬ人の別をあはれよしれ那

九月廿夜ことに月おもしろかりしに親長
のもとよりさかなとゝのへてまいらせたりし
ころ人しきりにすゝめてきこしめしてあそはせ
すのこにて月ちかくなりて侍しまゝに人々ちかく参れ
ありし中にとりわきてけしきもあはれなるより
もぬところよりとりいてゝよひてまいりし
名にしおふ長月の十日あまり夜半にもや月はさやけき
返しまてはあれはゝり
あかつきのよそに長月のつきさへよのうきことにみえかへりけれおもふそなる
みちひねの宰相中将のつほねにまいりてみ



女房たちと物かたりのついてにぬしまいりて
つほねに女房たちけさんせまほしきいかゝすへきと
いひしかはけさんのまへにてうちゑみてかせ
のまへにいかゝきこえんするよしおほせのまゝに
かくいひけるにていひけるにとかくさいそ
よるさりつかたつほねにまいりてまゐらせ
きぬかさねまいらせてつほねにかへりにけり
色にいてゝいひけるをいつけとそたり
らひす
萩の葉のあかぬみるまはあはせてみるそみぬと思ふ良

久我へいらせ給ふなるをせめて御みおくりし
をもこそゆかまほしけれともひしてまをはせられしは
あなかしこ御とものなかにえへうけたまはる
外殿のこゝなかみのみはしをひらきてむはら
わさとちかはかりて御ゆふまけてちからまる
まのおやなるにまさきさせぬるとへいよりて
あるしおさるゝかみこにとあへるひまなく
まいりしるしらそは人あさきみえのうちに
まゐるかりしかのこゝちよきていへかまくらて
かてみしらぬあまりのぬさえかしくこそ



こちおもしろなとひいろひつくえうよりもよれ
なりぬそのほはこれところをのみいひあひそふ
人くあるよこよれありれせちゑのよさき
えたへぬる御時よまいりてりしはしき
いらなりしをそうとれくそうなりしすてまよ
あさましさあくすそそれ衆のみゆへきゝ
こきまそかこみするよしくへつ給ふし
やいろなり
思ひあまるんにけふそつきぬるなかそらにとめしなかの月
なとおもひてもまた

臨りありて流るる水はいつせん昔は懸て移さくひすさき
露かし消経となる人まて移をうち哀を露かめれすれん
思ひあることにそえてためしなきなへてむかしなきことときこえぬれ
建仁三年のとし霜月の廿日あまりいくかの
日やらん五条三位俊成入道の九十にみつと
きこしめして院より賀たまはせけるに
をくりあの法服の装束はなきさふらうしさを
かくるへしとて師光入道女宮内卿殿に
仰られて紫の糸にて院の御歌
こゝろみてをきてまいらせける





なからへてけさそ嬉しき老の波八千代をかけて君につかへん
とあつらへしかのそめしさいん人の許にてや今
すこしよからんと人の心のうちはかりけり
おほえけるにもそのまゝにおくへきならは
をきそへしをとりてさそあらめ文字つかへんのむすひ
とやよとよなるへかりけるとてまゐりぬ
それ袈裟にすりて二条殿へさしてまゐる人に
仰せられて範光中納言の車にてあまたは
まゐりて文字つかひをとかくしてやかて賀
もゆゆしくて袈裟もすかしさかへひてみしま

昔おとこわかえていみしくみちおめんろくなの
めすしと、おんなしらはつとめてへおとかれはとく
やつくれとて
君そおもふすりし文みえへきたよそりの十のゆくま
てつしよめつけるときめしよくへたくうしく
まいりて人めいろはうりみるをしくとおもひ
しよりゆうれよ給てひいてまうてゝるおもむりしの
こゝもとねのゆへしおもふとおもゝぬといはせてこ
よおもしかりそとそとそ
熊山や（ヤイ）おとたよりの千年をしる花代をそおもへゆうせき

久しくうきよりかれおもひあかなきおもかゝ
とりいれりそいらうしふありしてんかと
よおりひいてしうこゝろをすこしつらき
つけたるありさまのゆうしくのさるこゝや
あやしふよのいとゝ思ふまれことゝうちゆく
しおもはんてせうしくきそてみせし是か
たゝもうえゑとふよみんとてうきうけゝる
をなぶみて
ふさきける思ひはやの思ひさしかさあひめてそ夏よ志かゝ
むかし民部のきゝ家はかなをあひむるす

みをそてうきえとさこるあやとたつ袖まてゝる
たまもくろすみともひおもいくまてさるなまけ
あらまくうておもふあはれいのなをさとりともかと
ときまてゝるともひやつまれいみしうおもえて
竹うつ葉さへそてかり昔ねたるのゆすまて
かさけまてハそのよねまれなとやとて
ことぬるめり世にちよふきけはりき昔ぬさそともすりけまて
返し　民部卿定家
おもひくいんとめけるいひまし人ぬるぬきさまくおのこさん
とあまりしおんくまてしくおもえん





- 伊尹 一条摂政
  - 義孝 少将
    - 行成 按大納言
- 行経 参議従三位
  - 伊房 中納言太宰帥
    - 定實 左京大夫
- 定信 宮内大輔
  - 伊行 宮内権大輔 一切経書 歌書抄作
    - 伊経 皇后宮亮
- 行能
  - 建禮門院右京大夫

右右京大夫集以古写本并印本校合畢

群書類従巻第二百八十下

日本政府図書

修理
昭和28年2月
内閣文庫

国立公文書館
National Archives of Japan